# 手紙　一

宮沢賢治

むかし、あるところに一疋の竜がすんでいました。力が非常に強く、かたちも大層恐ろしく、それにはげしい毒をもっていましたので、あらゆるいきものがこの竜に遭えば、弱いものは目に見ただけで気を失って倒れ、強いものでもその毒気にあたってまもなく死んでしまうほどでした。この竜はあるとき、よいこころを起して、これからはもう悪いことをしない、すべてのものをなやまさないと誓いました。

そして静かなところを、求めて林の中に入ってじっと道理を考えていましたがとうとうつかれてねむりました。

全体(ぜんたい)、竜というものはねむるあいだは形が蛇(へび)のようになるのです。

この竜も睡(ねむ)って蛇の形になり、からだにはきれいなるり色や金色の紋(もん)があらわれていました。

そこへ猟師共(りょうしども)が来まして、この蛇を見てびっくりするほどよろこんで云(い)いました。

「こんなきれいな珍(めず)らしい皮(かわ)を、王様(おうさま)に差(さ)しあげてかざりにしてもらったらどんなに立派(りっぱ)だろう。」

そこで杖(つえ)でその頭をぐっとおさえ刀でその皮をはぎはじめました。竜は目をさまして考えました。

「おれの力はこの国さえもこわしてしまえる。この

猟師なんぞはなんでもない。いまおれがいきをひとつすれば毒にあたってすぐ死んでしまう。けれども私はさっき、もうわるいことをしないと誓ったしこの猟師をころしたところで本当にかあいそうだ。もはやこのからだはなげすてて、こらえてこらえてやろう。」

すっかり覚悟がきまりましたので目をつぶって痛いのをじっとこらえ、またその人を毒にあてないようにいきをこらして一心に皮をはがれながらくやしいというこころさえ起しませんでした。

猟師はまもなく皮をはいで行ってしまいました。

竜はいまは皮のない赤い肉ばかりで地によこたわりま

した。

この時は日がかんかんと照(て)って土は非常(ひじょう)にあつく、竜はくるしさにばたばたしながら水のあるところへ行こうとしました。

このとき沢山(たくさん)の小さな虫が、そのからだを食おうとして出てきましたので蛇(へび)はまた、

「いまこのからだをたくさんの虫にやるのはまことの道のためだ。いま肉をこの虫らにくれておけばやがてはまことの道をもこの虫らに教えることができる。」

と考えて、だまってうごかずに虫にからだを食わせとうとう乾(かわ)いて死(し)んでしまいました。

死んでこの竜は天上にうまれ、後には世界(せかい)でいちばんえらい人、お釈迦様(しゃかさま)になってみんなに一番のしあわせを与(あた)えました。

このときの虫もみなさきに竜の考えたように後にお釈迦さまから教(おしえ)を受(う)けてまことの道に入りました。

このようにしてお釈迦さまがまことのために身(み)をすてた場所(ばしょ)はいまは世界中のあらゆるところをみたしました。

このはなしはおとぎばなしではありません。

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
1996（平成8）年6月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
1995（平成7）年5月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2009年7月16日作成
2009年8月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。